座　談　会

テーマ　全員が楽しく「わかる・できる」授業

【参加者】

教学指導課義務教育指導係長	武田　育夫
特別支援教育課指導係長	岸田　優代
南相木村立南相木小学校教諭	石川　政好
安曇野市立三郷小学校教諭	百瀬みさ子
安曇野市立豊科南小学校教諭	田中　賢也

【ファシリテーター】特別支援教育課指導主事　浅原 昭久

（浅原）

「発達障害児等を支える指導・支援事例集」の担当ということで，進行を務めさせていただきます。本日の座談会は，発達障害児等を含めて，「全員が楽しく『わかる・できる』授業」をテーマに行います。皆さん，同じ教員，仲間ですので，遠慮なく意見交換しましょう。

では，**はじめに**自己紹介を含めて，特別支援教育研究委員になって感じたこと，或いは座談会に寄せてお話をお願いいたします。

（田中）

委員の委嘱のお話に正直驚きましたが，光栄なことだと思いました。２年前に，国立特別支援教育総合研究所で３ヶ月間，発達障害や授業のユニバーサルデザイン化について勉強させていただきました。その経験を少しでもお伝えできたらと思い，委員を受けさせていただきました。

（百瀬）

特別支援教育研究委員会の委嘱状が届いた時，大変驚きました。私は特別支援学校に勤務したことも特別支援学級の担任をしたこともなく，特別支援のことは分からないので，なぜ私にと戸惑いました。初めての委員会のときに，浅原先生から，「特別支援教育のことは知らなくても構わない」「自分のやってきた学級づくりや教科実践の事例を」と聞いて，ほっとしました。

（石川）

私も百瀬先生と同じように，まったく経験がなく，なぜ私がと戸惑いました。実際の委員会の中では，他の方の事例を見たり，意見を聞いたりする中で，一人一人に応じた指導・支援が，非常に大事なことだと勉強させていただきました。

（武田）

授業がもっとよくなる３観点「ねらい・めりはり・見とどけ」というものがあります。この３観点については教学指導課が言っているけれども，特別支援教育課は，ユニバーサルデザイン的な授業と言っている。県教育委員会として各課で連携してすすめる必要から，座談会に参加することになりました。現場の先生方の生のお話というのは，非常に勉強になるので，ざっくばらんに普段感じていることや悩んでいること，

自分なりに工夫していることなどをお聞きできればいいなと思います。

（岸田）

私，実は現場から離れて長くなっていますが，通常の学級を担任していたときに，ＬＤとＡＤＨＤを併せ持っているお子さんを担当させていただきました。当時は４２人の子どもが在籍する学級でした。今日は，そのときのことを思い出しながら，テーマの「全員が楽しく『わかる・できる』授業」について，皆さんとお話しできればよいと思います。

（浅原）

学校現場に様々な課題とか難しさがありますが，そういう中で委員の**先生方が今抱えている悩み，あるいは，課題について**お話を聞かせていただきたいと思います。

（石川）

改訂された学習指導要領で指導内容が増える中で，すべての子どもができるようにと願って指導をしていますが，例えば，体育では個々の技能差があります。そのため，すべての子どもたちが，分かったりできたりしないことが多くあり，**個々の目標設定であるとか，達成状況について，どのように考えていったらよいのか**と感じています。また，小学校では楽しくという視点が強調されていますが，中学校に向けてつけるべき力をきちんとつけていく必要性を感じています。

（田中）

今まで発達障害等の特別な支援を必要とする子どもたちに対しては，工夫や配慮した支援に心掛け，すんなりいっていると感じています。ですが，高学年になる子どもたちは**思春期を迎え，指導の難しさ**を感じたことが以前ありました。「支援が必要なあの子たちばかりに目をかけて，うちらのことをどう思っているの？」と，不満をあらわにする子どもたちに対して悩んだことがありました。

（百瀬）

意欲満々，何でもできるようになりたい１年生ですが，反面，やりたいことはやりたい，やりたくないことはやりたくないという，はっきりしたところが低学年特有かと思います。そんな中，**特に特別な支援を要するお子さんを，できるようになりたい気持ちにさせていくことが難しい**面があります。今まで，席に着かず飛び回っているようなお子さんも１年生にいたわけですが，そういった子どもたちをクラス全体の中で位置付けていけるよう腕を磨いていかなくてはと思っています。

（浅原）

今３名の先生方に，悩みや課題についてご発表していただきました。石川先生と百瀬先生のご発表から，まずは，**「学級全体へのねらいと配慮を要する子どもを含めた技能差・能力差」についてどう考えるか**ということについて，意見交換していきたいと思います。

（石川）

私が考えて大事だと思うことは，二つです。一つは，**ねらいを幅のあるものに**していくこと。やっぱり，いろんな子どもたちがいる中で，ねらいをどのように定めていくかが大事なポイントになるのではないかと思います。

二つ目に，**教科の系統性**。どういう力をつけるのかという積み重ねが，非常に大事に感じられます。例えば，マットの上で前転ができない子どもに，跳び箱５段６段での台上前転をやりなさいと言っても，無理な話だと思います。ですから１年生から６年生までの間，力を積み重ねていかなければいけないですし，更に中学校に行くにあたって，どういう力を今つけるべきか考えな

ければいけないと思っています。

（田中）

ねらいについては，**ハードルをやや低めに設定**して，みんながここはクリアできる内容に絞ることがいいと思います。そして，視覚的に分かりやすい教材を使うとか，大型テレビを使って友達のノートを見えるようにするなどの工夫をすることで，より分かりやすい授業になり，みんながねらいを達成しやすくなると思います。

（岸田）

発達障害がある子たちも，他の子どもたちと同じように，「分かるようになりたい，できるようになりたい」という願いは強いものです。そこを支えてあげることはとても大切です。例えば先生が，「あなたは台上前転ができなくても，お友達と仲良くできるから，それはそれでいいんだよ」と言っても，子どもたちは納得しないと思うのです。とは言え，決められた時間内でやっていくとなると，発達障害の子どもたちに限らず差は出てきます。そういう時に，分かりやすいテクニカルな部分の教授法，教材研究に私たちは全力で取り組むべきだと思います。**その子なりのできる条件を考えて，最終的にはできるようにしてあげたい**，私自身，そんな思いでやってきました。

また，そのような取り組みの前には，周りの子たちが，「ずるだ」とか「○○ちゃんばっかり」と言わないような**学級集団づくりがベース**になると思います。**「配慮はするけど特別扱いはしない」**，そういう教師の姿勢が大事だと思います。しかし，どうしてもできないこともあります。特に，５・６年生になってくると，心理的に難しい面もあるので，「どんなにがんばっても，ぼくには無理なことがあるんだな」ということを本人が納得できる形で胸に落としてあげることも大切です。

（浅原）

今日のテーマが，発達障害児等を含めて，「全員が楽しく『わかる，できる』授業」ということですが，全体の目標，個々の差ということで非常に難しい部分だろうと思います。武田先生，その辺いかがでしょうか。

（武田）

ちょっと堅い話からすると，学習指導要領に示されているものは基準性。つまり全員ができるようにという中身ですね。かつてあった歯止めの規定というのは外れ，それをクリアすれば，子どもたちの状況によって学習指導要領を超える学習をしてもよいということです。

次に，ちょっと違う視点からお話をしたいと思いますが，私がここに来る前の学校で，１年生がクラスでチャボを飼っていました。８羽くらい。夏休みが明けてから飼い始めたけれど，子どもたちは休み時間チャボで遊ぶんだよね。はじめはチャボはおもちゃなんだ。チャボを放り投げたり，高いところに置いてみたり，追いかけ回したりするわけね。そうやってチャボで遊ぶわけ。チャボを道具として遊ぶわけ。その中の一人の子が，チャボに触れない。怖い。みんなが遊んでいるところを，ぽつんと見ているわけだ。ぼくは触りたいんだけど触れない，チャボと遊べないと言うわけです。担任はどうしたかというと，その子がチャボに触れるのを待つんだよね。「この子はきっと触れるようになるだろう。きっとチャボとかかわれるようになるだろう」と信じて

いるわけ。つまり，**子どもは自ら乗り越える力があるだろうと信じているんだよね。**

実は，待つという行為は一つなんだけれど，ある先生は，ものの本を読んで，子どもは自分で乗り越える力があるから，待つというのを理屈として，つまり，心の底からそう思わずに待っている。悪く言えば，形として待っている。でも，ある先生は，本当に子どもを信じて待っている。これは，同じ待つという行為だけれど，片方は支援になっていないけれど，片方は支援になっている。なぜかというと，**本気で子どもを信じている先生は，「まなざし」が違う。その先生のまなざしを見て，この子は力を付けていくんだよね。**もっと言えば，この子をそういうまなざしで見ていることを他の子も見ているから，先生はぼくたちのことをきちんと見て，ぼくたちのことを信頼しているということを感じている。そして，３ヵ月後にその子はチャボを触れるようになった。そうしたら，３ヵ月の間，他の友達がやっていた遊びをずっと自分一人でやるわけだ。３ヵ月の空白を自分で埋めるわけ。

そういうふうに考えてきたときに，**私が一つ言いたいのは，教師が最初からこの子はできないんだ，と思ってはいないかということですよね。**この子はできない子だと思っているところで，いろんな指導や支援をしたって，その子へのまなざしにならない。**私は，教育というのは，どういう目でその子を見ているかという「まなざし」だと思う**のだけれど，そこのところがまず一つあるのかなと思います。それが一点目です。

ところが，二点目としては，すべての子がチャボを触れるようになるかというと，そうではないですよね。もっと言えば，人によって，できることとできないことがある。できることとできないことがあるということが前提となるような目標というのが，最初からどうかという話がある。最初から跳び箱の５段目でぐるぐる回らせることはできないですよね。それは，その段階では目標にはならない。そうすると，今ある子どもたちにすべてができるような，**ねらい，目標をつくっていくということは，その先生が子どもをどのくらい知っているかということになるわけだよね。**ここが大事ですよね。でも，障害などがあってできない子がいる。そこで，その子をどうするかという話ですよね。問題を投げて終わりましたけれど。

（百瀬）

やっぱり，難しいお子さんはいると思うんです。字がどうしても読めない，書けないというレベルから。**でも，気持ちの上で，到達したんだという気持ちをもたせてあげることは，私たちはできると思います。**それがいいことなのかと迷いもありますが，「あなたは最初，こうだったけれども，このようにできるようになった。これがすごいと思うよ」と。周りの者がそうやって，「あなたのここが素晴らしいね」と言えるようになりたいと思っています。

例えば，算数の中で，すぐにつまずいてしまう子どもがいたとします。でも本人は，「ここのところまでぼくやったんだけれども，ここから先が分からなくなっちゃった」とは言えないと思うのです。そこで，「〇〇さん，ここまで分かっていたけれど，ここから先が分からないんだって。じゃあ，今日は，これを考えてみよう」と授業の課題として据える。すると，その子は，「この授業はぼくが創り上げているんだ」という気持ちで参加ができ，意欲がもてると思います。意欲がもともとないのを引っ張り上げるのは大変ですが，「ここ

までできているから，ここ頑張ってごらん」と支援すれば意欲が高まり伸びていけると思います。低学年は，特に気持ちの面で意欲付けをサポートすることが大きいと思っています。

（浅原）

今の話とかかわる部分もありますが，続いて，二つ目として，**「クラス全体への指導と特に配慮を要する子どもたちへの指導・支援」についてどう考えていくか。集団と個という視点から意見交換を**したいと思います。

（田中）

基本的には，**ユニバーサルデザイン的なことが大事だと思っています。**クラスにいろんなお子さんがいるので，それぞれの子に分かりやすい手だてを最初に打っておくと，みんなにとって分かりやすいし，教師も余裕が出ると思います。それは，特別支援教育的な視点なのですが，学級経営にもすごく大事なことだと思いますし，やってみて，手応えを感じています。

ですが，それでも勉強等でつまずいている子どもには，個別の手だてを打っていく必要があると思いますし，勉強ができる子たちには，問題ができた後のことも考えて別の課題を用意するなどの必要があると思います。私のクラスでは宿題を二種類出しています。それまでは，ハードルを低く設定していたので，宿題も簡単過ぎるとか，もっと出してくださいと言う保護者もいれば，逆に今くらいがちょうどいいので増やさないでくださいと言う保護者もいたりして苦労しました。二種類に宿題を出すようになったら，保護者からの要望がなくなりました。

（百瀬）

特別な配慮を要するお子さんのことだけを考えていると，クラス全体が見えなくなってくるというような悩みはあります。その子の気になる部分ばかり見ていても，うまくいかない。その子ばかりを特別視するのではなくて，全体の子どもたちへの指導をしっかりやっていくことで，授業づくりや学級づくりを進めることも大切だと思います。

（岸田）

「特別支援教育」をほとんど意識されずに授業をされている学級に，結構配慮の要する子がいることがあります。ところが，**すてきな授業をされている先生の学級では，配慮を要する子どもが目立たないんです。**たくさんの授業を見て感じたのは，**気になる子どもの支援に意識が行き過ぎると，全体が見えなくなったり，全体のねらいや学習課題の据え方がぶれたりする**ということです。基本的な授業のお力があると，障害のある子にとってはなくてはならない支援が，どの子にとっても，有り難い支援となっていました。例えば，板書のよい授業って，みんなが集中しているんですよね。ＡＤＨＤの子は，途中で集中が切れてしまうことがあるので，ふっと我に返ったときに板書がきれいで分かると，授業に戻れる。他の子にとっても，きれいな板書ってありがたいです。こう考えたときに，ユニバーサルデザインって，どの子にも役に立つということであり，何か特別なことではなくて，先生方の今持っていらっしゃる先生方のスキルがアップしたり，それを後輩に伝えていったりすることがベースなのではないかなと思います。